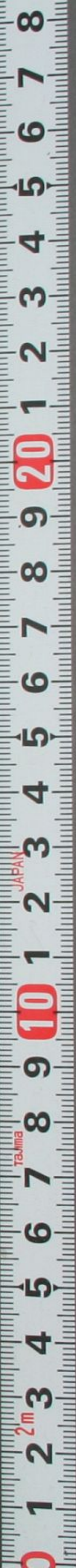


小精舎日記  
二

大正八年十月中浣起筆

特別  
14  
1919  
328

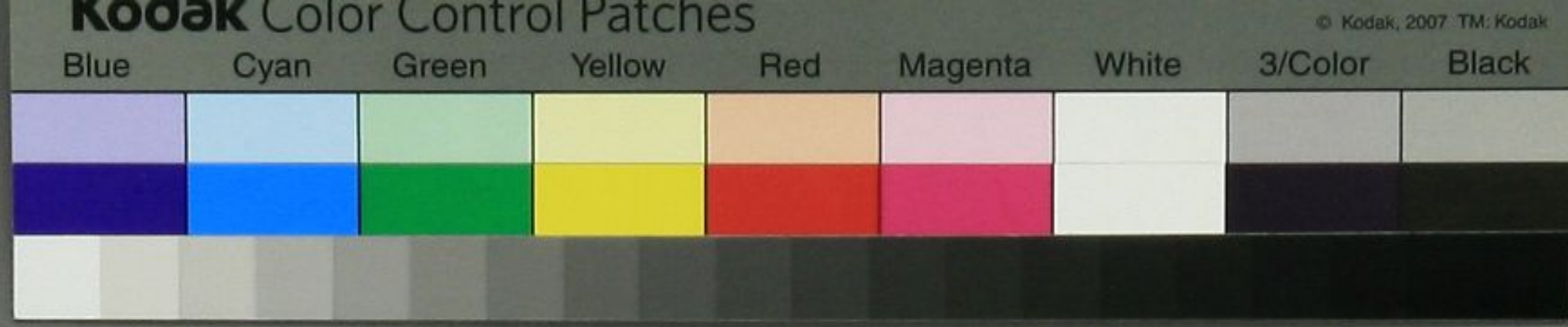


A ledger page with a blue border and 11 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the narrowest and the others being wider. The page is otherwise blank.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

38- 9117

大正八年六月一日  
 西野 豊  
 清水 潤  
 人 海  
 西野 豊  
 清水 潤  
 人 海



### 東條琴臺先生建碑趣意書

琴臺東條先生明敏倜儻ノ資ヲ以テ學皇漢ヲ兼ネ博覽強記多ク其ノ類ヲ見ズ當時先生ノ學幕府ノ學風ト相容レザル所アルヲ以テ志ヲ得ズ榊原政令公先生ノ尋常儒者ノ比ニ非ザルヲ察シ之ヲ禮聘ス嘉永三年先生伊豆七島圖考ヲ著セルノ故ヲ以テ幕府ノ譴責ニ遭ヒ高田ニ退居シ爾後十有九年帷ヲ垂レテ業ヲ授ク其ノ說ク所經義文章ニ止ラズ經世實用ノ道ヲ兼ヌルヲ以テ大ニ地方ノ士人ヲ啓發スル所アリキ明治ノ初年鎮將府ノ召命ニ應ジ遂ニ居テ東京ニ移シ後宣教小博士龜戶神社祠官トナリ十一年九月廿六日八十四歳ニシテ病歿セララル先生著述校正スル所ノ書甚ダ多ク先哲叢談後編儒林小史經籍通志津逮書目伊豆七島圖考清二京十八省輿地全圖聖世紹胤錄官許後發行差留等數十部ニ達ス其ノ學界ニ貢獻シ世間ニ裨益セシ所偉大ナリト謂フベシ先生世ヲ去リテ已ニ四十餘年及門ノ士亦漸ク稀ナラントス因リテ同志相謀リ一碑ヲ高田市舊城外ニ樹テ先生ノ功德ヲ不朽ニシ以テ追慕尊敬ノ志ヲ致サント欲ス大方ノ諸彦吾人ノ微衷ヲ贊襄シ其ノ資ヲ義捐セラレンコト惘望ニ堪ヘザルナリ

大正八年九月一日

發起者 門人 清水廣博 西尾豊作

贊成員 (氏名イロハズ)

- 原田親光 八田久作 富永孝太郎
- 竹村良貞 瀧見直臣 塚田脩藏
- 中村進午 永野宇平治 室井常領
- 上野貞正 野口孝次郎 黒田英度雅雄
- 山岸光亨 蒔田彌太郎 増村慶次
- 丸山豊次郎 増田義一 間嶋與喜
- 福永孝太郎 荒井賢太郎 安藤達二
- 宮川頼徳 柴田克巳 清水宜輝
- 瀬尾原始 杉本直形 杉浦久大

- 委員
- 高田 原田親光 高田 瀬尾原始
  - 同 小倉右馬 同 來海一
  - 同 村澤節雄 東京 竹村良貞
  - 東京 増田義一

### 記

- 一、建碑設計約壹千五百圓ノ見込
- 一、寄附金届先ハ高田市岡島町榊神社社務所内琴臺先生建碑事務所 遠隔ノ方ハ原田親光宛郵便爲替又ハ高田市内銀行爲替ニ願フ
- 一、寄附金締切ハ大正八年十二月廿日





東條琴屋ト高田トノ關係  
及東條琴屋其編成之次第

今取東條琴屋先生其碑ノ義ハ何ゾ五十年  
前ノ故人ニテ面識ナキ人多ク隨テ無錫取説ニ有  
之豫子ナレト夫ハ程夜同類ニシテ單ニ無縁故  
ナリト断言シ難シト云フハ由來東條琴屋ハ紳  
有家ノ徳先代政令公カ明史稿傳編纂ノ當  
時大久保井部木村ノ儒臣ト共ニ其事ニ從ヒ主  
トシテ訓令校訂等ノ徳用ヲ兼ハリ其器ノ尋常  
ナラサルヲ徳賢ノ家ナリテ徳用ヲ兼ハリ其器ノ尋常  
日ハ朱子學ノ派ノ全盛會マ晋基カ幕府ノ譴  
責アリシヲ救ヒシテ經濟ニ政治ニ處世實用ノ

學識アル先生多ク高田ト下サレタハ深キ思召ア  
リシ事ナラシト并察セラル先生ハ勉メテ經濟  
處世ノ道ヲ帝ト口授セラルシノミテラス卒先之ヲ  
實行セラレ要路ニ向ツテモ直言ノ結果自他罵  
罵言惡口ニ當リ終ニ敬遠セラルハ至リシハ不得  
止ノ情勢ナリシ米船渡來<sup>嘉永</sup>以後天下騷然  
櫻田及蛤御門ノ變御上洛及征長ノ役等社會  
ノ有様先生ノ言ノ如ク着々實現シツク有ルヲ  
見テ稍具言ヲ信スルト共ニ隱然其知ヲ成シ  
タムモノ多カリシニ維新ノ初ノ早クモ政府ニ  
召サレ常務ノ任任ノ事トナリ高田藩士トシテハ  
僅ニ數年ニ過キス寧ロ天下ノ偉人トシテ敬重

スルニ足ル可ク而テ高田藩學子ハ慶應三年己卯  
ヲ生シ戊辰ノ冬倉石典太ヲ儒臣ニ召出サレ尋  
テ脩道館ノ設立ハ先生與テ切アリ而テ其教官  
長ニ舉ケラレ其下水村倉石井部此本村井部ヲ初メ  
共ニ代ナリ渡部室面氏モ之ニ後事シヨリ明治七年五月ニ至  
リ館ヲ改メテ縣立第四分校トナリ初テ高田ニ英  
學ヲ置カレ廣博之ニカ校監大井茂作校學ヲリ其  
後轉々シテ現在ノ高田中學校トナリ又中學校  
校ノ創始ヲ第四分校ト定メラレムル上ハ其元祖  
ニ脩道館ノ教官長而モ館ハ藩士ノミナラヌ  
廣クシ庶人ノモ聴講ヲ許サレ一般登館セシモノナ  
レハ上越人士トシテハ至極無縁歟ナリト歎言歟

歎

西尾重元氏ハ尾品ノ藩人先年信長松代中學校  
勤勞方中出地ニテハ佐久間氏ノ事ハ神ノ如ク人モ  
能ク知リタムモ東條氏ノ事ハ知人ナク等シク  
學事ニ立ケムル人ニシテ如斯差アルハ不都合ナ  
リト憤慨シ茲ニ於テ傳記ヲ編成スルノ志ヲ起シ  
其後直江津宿高學校ニ轉ヤシテ幸ヒ其事ハ  
從ニ高田圖書館ニモ屢チ訪廣博ニ聊カ力ヲ  
副ニ稿成リ尚下田歌子女史ニ就キ訂正シ以テ  
印刷シタルモノナリ又先生ノ妻女ハ戊辰戰爭中  
死シ其具墓石ヲ更ニ建設シタル篤志家ナリ  
キ時恰モ先生ノ四十年ニ相當ヤシクハ廣博主

トシテ岡嶋枝借道館内ニ其祭典ハ々擧テ西尾ハ傳  
記ノ編成ヲ申告シタリ其序上ニ爾後建碑ノ事  
ハ廣博ニ負擔スヘリトノ依頼點止らん場合ニアラス  
直ニ承諾ヤシモノナリ然ルニ其後西尾氏ハ記別  
田邊實業學校長ニ轉任シ現職廣博ニ亦上京スル  
事トナレリ依テ今般建碑趣意書ノ如ク諸彦ノ  
賛成ヲ得テ發表シタルモノ也  
右経歴ヲ畧序シテ御參考ニ備フト南云  
追テ先生ノ息録二郎等已ニ逝キ其跡モ定ムカナ  
ラス仍テ外孫下田歌子女史ニマテ建碑ノ意思ヲ  
相通シタル處女史モ大ニ此舉ヲ悦ビ落成ノ際ハ  
高田ニ行キ親シク謝辭ヲモ可申述ト申居候此般

モ申副ハ假也

大正八年十月

清水廣博



孺人諱壽越後西條丹吳平兵衛君長女以弘化元  
 年四月二十四日生年十二歸市島氏大正八年病  
 歿享年七十六姑蘇不復返法諡曰深厚院釋尼妙普  
 日六

之北也墓誌の行也先夫の墓石の一側  
 而之刻すべき者也



春風書  
 画係楊  
 船  
 高田緑雲刻



詩題窓  
外竹茶  
煮石根  
泉清人

○槐葉泉紙帖二帙六冊天保年分新見山路の  
刻下る所近衛頼朝の墨蹟を収む。選擇  
極極尤も精也。此の帖甚得るを以て、偶々坊  
：也。此の帖、新見家より取り出し、今もその  
を得たり、殊七帖あり、正本也。此の帖、遠  
を以て、新見家、記念として、家傳とす。今  
附記す。此の帖、新見家の所蔵なり。

本一 秀才の筆

本二 心匠三體

本三 深詠和音

中四 前後六仙

中五 朗詠集

中六 詠歌大攷

○禪月集 宋代三身修と云らんは骨休の詩集也、元禄八年 京都に刻す所、四冊をこし、禪月羅漢と拂くを以つて名あり、吾書畫山冊に於て此所、此傳を紙ふ、他つて此集を欲すもの花柳家こ多くあんとも今、稀觀のもの也、尚く上ありあ中、西彦守の所、此集を古出つ

伝つて紙の價十圓也

○素園石譜 四冊の素園書可林有蘇仁南の輯しる所、余未だ此枚をを見よ、稀んれ傳りるもの言ふ也、次一本と傳ふ云張字をこし、價をいふし、然んども、寧ろ石癖あるもの、石を缺く可くも、石の石ををりし價を概して傳入することあり

○前月得たる昔春高年録の日徳(漢文)此は翻讀するも余の家に編んたる一冊も、ちう、白く紙後の富家市此次郎を刻と花し、未だ、  
云々

●有り、先考の遺印春翁の刻に成りたるもの四五あり  
此記よりある所也

此の日記と共に送序一紙を得たり頃、その日記  
桂香可也物の折、出しし之んと視るに春翁  
の遺記七印七摺えあり、春翁の才秋琴の  
を述ぶるの序あり、然るに題視するに、考の  
春翁あり、あまが、頗る古白粉陰に似似す、  
却つて朱筆を入る字を指すに、平  
く春翁と、且つ此の送序の末の春翁の記に  
二作あり、白体七粉陰と見ゆ、粉陰と

春翁と交り厚くし、かある、恐らく此考  
あり、春翁と記し人の命正を乞ひたりと  
の、春翁の外、何人、他の評然あり、  
序中云々とする所、秋琴の序に、  
はことあり、然るに秋琴を述ぶるときは  
も或い後託するん、尚ほ日あり、へき也

○坊号、蘭若菴詩集二冊を得、仙臺の僧  
宗河慶義の記を刻したるもの、上巻の一半  
我御後の長尾秋翁と、（増）巻の記と多く載



添加しやうとて舊を忍び留る具を成しやう、序  
上余も中出ししことあり、此の序は我々の  
りんとて昔も中今を委しく記憶をぬけり我  
々の死後、まゝの序、不分明とすうやせん、  
ゆゑこの序の文のことを略し、直ぐも可とす、  
余先年、久修校、素石、海兵衛、をいひて  
聞ひ、其の序記をたのむ、  
あり、不覚、自全、  
筆記をせん、  
し其の雑感を述ぐ、  
10 山田 甲

を可とす、  
出し、  
此序、  
其の序、  
一、  
の序、  
備、  
の序、

通る本ありし抄件：刻る得る本のこの二二二あり

林谷山人待鈔印譜

一

林谷の二條藏別本と云うべきもの幾多あり此を待鈔の終に之れを附す其後  
に空田(聖)曰谷頌、跋書、外二序  
林谷自書十四と載り等尾に別々  
用んの跋あり、此を名し稀に

鳩谷文集鈔

二

天目愚孔平其人言うるごとく、  
七海多家の抄と云う所、其の跋をい

梅りし稿んを先に出ひるもの六六  
田の價、と云んると方々後、この方  
ハ数字本らん、右江をい、初巻に從  
妹の文を七載す

組妹書牘

組妹の振を果然改と案中二三あり  
と云得る所のもの天狗説、冊帰  
靴帖を牘に天狗説を改し  
うぬかのこ、帰靴帖、北筑石川  
貞梨の梓、後、所を其人の跋

刻





倭を玩具と市の駄をリシマンツの  
首を改し、一脚の鐵の鎖を附しあは  
二、倭の玩具と推しあはるる四の  
長活法を教へ給ふ。御のこころに  
後一節の御解を改へん。十一月廿  
〇北城の報北園大印を上京せしめし余は  
年、初刊し給ふ。この活字の味法を  
常り前記の如くを三十の問續載せん  
ことを約し、関の五の問合草を  
しつゝ、都下にもあし草紙を

と得き、又と自合らばせしむ。年首  
事、うき時一奉、三十回を録せん歎

〇細川木為、世に交りて、癖あり、漫遊中、河内  
を賄ひ家、高きし物とを例し、庭を程々  
の井を植自、うき、北邊、草花、  
しく、倭の活字、得る、木活字、  
の活字、首の、内、二十一、首、中、  
の活字、と、ある、の、活字、  
を、あ、す

若問生、活字、我、活字、  
吃、北、散、字、

千戶侯如

此中何所得問我，不言橫死亦已去，對牛生  
勞身

諸君聽我言，相與教牛，身隨我意如小艇  
似似泊清江

臨與古靈陽，志與白髮長，曳節牛中往，不  
似世人忙

不與與梅癯者，思與牛且自金細，  
身改書，  
身在此世苦，中斷生自為重，方生休苦辛

10 山田甲

公卿本有輕

有非以為富，無非以為貴，  
克妻嘆

四海六天沙漠地，一角總我二三早，  
馬昂昂

乾坤何不求，終日以此裡，  
言及生死

滿城傲勢湧，又使窮鬼窮，  
且莫出此中

長揖掉此物，  
來緊掩，  
不心王叔臣

長為水牛主

○余の年十二月の印刷會社の社長とさうして  
一十年に亘んとす、此の世の大勢を承け職工の  
跳梁甚しく、佛の物價の暴騰、乘し職工の  
賃銀増額を迫るもの歟んと毎月増給又増給  
夫んと度止する所を知らず、余も社長としての  
任務の増給の法を為すにありともその  
既二十一年未滿うし十割の増給を為すに  
職工の其の法に添ふもの使用人たるも  
物に連続しし有給を多くするもの甚しきあり

○余、異教と謂ふべし、但し幸ひも我社の罷工  
急業の失態を見ず、増給の結果、印刷物  
の値上げを行ひ、為り得る所の支分所を  
と給うたり、今年もは約の利益を以て年  
と比し二倍の以上多し、職工の要求は  
同く今代に此の利益あることを以て増給を  
求め、物價の値上げ、彼等の言ふ所敢て  
は、物價の昂騰は彼等の地味たるを  
後益に与しきことを示す

○余は年以來、海を以て事とし、あり



集二部の書の体裁に倣ふに敢て  
その中より古雅の圖あり川崎叙海  
の圖あり享保十二年の附録も惜  
一枚補せり、稀規の如くは煩き  
あり

一 蓬沙考

倭書方言

小石橋

一冊

倭書方言を採りて其の  
通稱上原進治印支配河部長三郎  
名の跋あり、  
名

一 安永七年長崎圖

七巻

○下谷御徒町の古村書画方：素園石濤の字を  
き部と号す。みよと号す。と改号しそ  
よしと号す。列りる。向村黄山松花と号す  
村自身全文を映す。西と玉田に源と映す  
わしの画：附属する。篆文并：序跋の印は

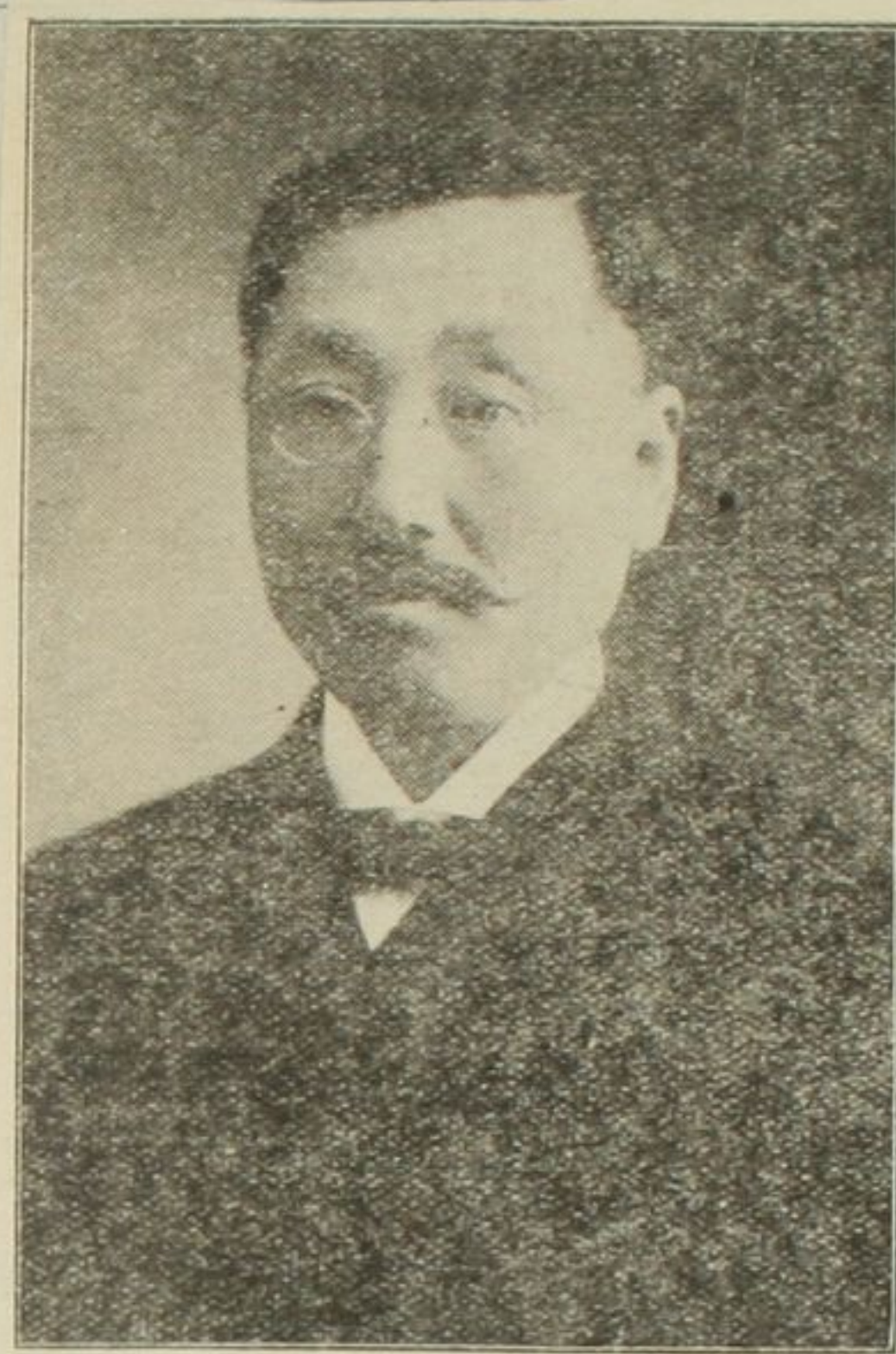
まゝの中井お石の筆に成る。芭蕉と号す。黄石  
の押すもよる所。と号す。尾：黄村の跋あり。又  
耶と号す。北の稀んを云々。板橋栲心  
板の北の面。村の書。谷の一畫家の画し。竹  
石園と號す。黄村苦心北一部の書と号す。黄石  
と号す。批見ふ。北の書。店主人の書と号す。  
前田家の書を号す。おの中。飯亭。一部  
書を号す。と号す。先年。浦上春。の字し  
と号す。浅倉の書。何人の年。と号す。比  
りと号す。今。と号す。と号す。

○寸許畫冊六帖と雖ふ内四帖本因行外二帖也  
高麗珠岩の古画あり、骨根格在中村不軒の陽南行  
中書けし他の手本一帖中村不軒の交せし格  
室ある一帖、北内あり却の帖一帖五十二枚と描き  
しものしと、品力意を存し、碎岩の山お眺るの  
草もあらしき、格あり格、碧空の支那公侯黎  
に随うしあらしき、若首に徳の張解り、あらしの  
画を古画海道を画帖の志、志二十枚、技画、  
あらしし、今も十枚、格あり格あり、  
滋味興あり、格あり山ありの格あり格あり  
一帖、格あり、一帖、格あり、

格、格ありと雖ふも、あらしし、あらしし、格あり、  
格中、格あり、一流の人、あらしし、あらしし、格あり、  
あらしし、格あり、格あり、格あり、  
北此格の古画、あらしし、格あり、  
刻念、あらしし、格あり、  
(十一月廿分記)

○十一月廿分記、かの格あり、  
此人朝鮮の古画、あらしし、格あり、  
高麗珠岩の古画、あらしし、格あり、  
其の古画、あらしし、格あり、  
殊に古画、あらしし、格あり、

とくふふと示さん印漢とるさん言かの巧  
 手多、少中、最刻の體漸く変し、藝術的、比  
 寸ハ印りて而も、いかに思ひ、保し、韓國の  
 北へ、近敷るるもの、泡無し、果、これ、格、才、一、便、の、名



黄鐵先生



### 黄鐵先生小傳

先生姓は黄、名は鐵、朝鮮京城の人累世貴族たり王妃事變の際我公使三浦子爵と結托する所あり遂に  
 亡命し我邦に來り金玉均朴泳厚諸氏と盡瘁身を忘る又伊藤公爵其他名流と交遊し韓國の爲に劃策する  
 所多し藤公の統監たるに及び歸りて農工部次官と爲り大に經綸を行ふ尋で公の命に依り出て、觀察使  
 たり治蹟最も著れ從二品に叙せらる、常に公の帷幙に參し又詩文の歡を爲す公の薨後意を官途に絶ち  
 冠を掛け以て知己の恩に酬ゆ曾根統監屢治化の要を問ふ韓國の合併なるや我事已成矣請ふ風塵を謝し  
 て文墨に餘生を送らんと復た政事を談せず再び東渡し大阪府に入籍し山口鐵郎と稱す蓋し亡命中の假  
 稱を用ゐたるなり藤澤南岳翁と翰墨の交を爲す翁爲に文を作り其技を激賞せり常に山水の遊を好み諸  
 名勝を尋ね足跡海内に遍し數年前東京に寓し鉅卿名流と詩酒徵逐以て胸中の幽鬱を遣る先生人と爲り  
 温厚誠篤詩文に長し又書を善くし篆隸楷行盡く堂に入る特に畫は六法に精通し山水花鳥人物樹卉皆其  
 妙を極む元の四大家の神髓を採收し氣韻生動墨氣蒼潤、南宗の正法眼を得たり又篆刻に巧に其用ゆる  
 所の印章皆自刻なり眞に三絶と謂つ可き也





石ころの及小松系と云ふん小松の生たるあゝ大  
松林をあり皆縁に接して連山あり想像と  
同じいゝをい読ふ、そのさき西に言ひ来、冬  
冬一とうとを模模型を出し示せる  
此の法雖の心と鐵筋、日蓮を拾せしめん  
心うたふと勿論、と此今鐵筋お仙後を  
逆道は方々心一執着古中一ううと言ひ鐵  
筋此の筋、腹の無いつと困ると海のこと  
其地がうく

道是四々東海鐵筋の物の出さく大雑を  
の心と鐵筋と云ふ是の心と鐵筋と云ふ  
海濱を矢と云ふ、一讀心と能くと云ふ、余が  
が不雅の道と云ふ、云々中一透しと三  
の道と云ふと云ふ

此の記すと云ふは後百道道と云ふ、早稲田文と  
の切抜と事と始らる、乃ち云々叔めあゝ

十二月一日録

## 法難に就いて

道 遙

「法難」は全く咄嗟の作で、由來話をするほどのものでもないのだが、折角のお尋ねだから、思ひ出すまゝ、を話して見よう。

ことしは、シェークスピアの反譯も、年内にもう二冊だけは譯しておきたいと思つてゐたし、他にも一二書きかけてゐる長い考證物もあるし、それこれで、創作をしようといふ積りはなかつたのである。ところが、段々と豫定以外の仕事が増えて來たのと印刷能率の減少したのとで、期待が總て向うからはづれて來たから、骨を折つて譯して見たところで、迎も今年中に出版されさうも無いと思つて、反譯のはうは見合せた。ちやうど其際に、易風會以來宿縁の深い東儀鐵笛君が、最後の藝術的運動として、いはゞ、背水の陣を布いて、新たに新文藝協會の名の下に一劇團を組織するといふ事が起つた。私は、自分としては、もうさういふ事業には、全く關係しないのであるのだが、早稻田大學の古い校友たちは勿論、さうでない方面の人々さへ深い同情を同君に寄せて、其後援に力めてゐるのに、宿縁の深い私がまさか錢別もしないで傍

觀してもをられない。それに、新店は、とかく開業日の賣物が大事なものだ。少くとも何か目新しい物を賣物の中に加へる必要がある。で、一體君は何を眞先に賣る積りかと同君に聽いて見た。と、まだ何も無いといふ。そりや飛んだことだ、もう餘り珍らしくもなくなつてゐる反譯物や前に上演した物なぞぢやいけないよ、と言つて見たもの、どういふ手頃な物も、早急には目附かりさうにもなかつた。あんまり氣の毒なので、急に思ひ立つて書いたのが、あの「法難」である。だから、全くの咄嗟の作である。

いや、別段腹案が有つた譯ぢやアない。鍋冠り日親は嘗て書いて見ようかなと思つたこともあつたが、それとても筋を立てて見たことはない。けれども日蓮上人と私とは全くの無縁でもない。

私の家は本來の法華宗である。父も母も凝屋といふ程の特色もなかつたつげが、とにかく其信者であつた。父が美濃の加茂郡の太田陣屋を退職して、名古屋近在に隠棲したのは私の十歳の時であつたが、其頃は、歸農といつたは名ばかりで、仕事もなく、道樂もなく、閑過ぎて困つたが爲か、或は深い信仰からか父は朝夕に約一時間ぐらゐ宛、佛間へ坐り込んで、題目を連唱するのが定りであつた。たしか小さい彩色した上人の木像が佛壇の一隅に安置してあつたやうに思ふ。其唱へ聲の特殊なのが今も尙耳元に聞えるやうだ。父も、私同様の無藝な男であつたので、怪しい謠曲以外には、大きな聲で唱ふことは何も出来なかつた。で方便品の只のいくさりをさへも、本式に誦することは知らなかつたらしく、いつも只南無妙法蓮華經とばかり唱へてゐた。何でもそれを何千遍とか唱へるのが自分の規定であつたらしく、いつも指で算へ／＼して唱へてゐた。それが「ナンミョレ／＼」と聞えるのを子供心に異様に感じてゐた。それか

ら佛壇の大きな引出しの一方には、誰の著だかは記憶しないが、上品な製本の、抹香くさい高祖傳が、いつも大切さうに入れてあつた。たしか三冊物で、全部繪入で、上欄が總て畫解であつたかと思ふ。それを折々持出して草雙紙並に臥轉んで讀んでゐては叱られた。だから、今度書いた「小松原の法難」などは、畫面では、もう五十年前からの馴染である。

けれども上人の傳記を劇に取扱はうなぞといふ氣は、つひぞ無かつた。ところが、今度ふいと興が乗つたから筆を執つた。どうして興が乗つたかは、よくは分らない。或は自由劇場のブリューを観たのが、幾らか誘縁になつたかも知れない。信仰の無意義を力説したらしくも見えるあの作とは、寧ろ逆な行き方と私の作がなつたのを見ると、或はさうかとも思ふ。しかし、それは半分がた出来てから氣が附いたのである。はじめは只ふつと書かうと思つた。それは、あの小松原事件は、本來がそつくり其儘悲劇になつてゐるからである。

すると、妙な事があるもので、此作の腹案がほど定まつたと同時に、下谷の國柱會館で河野桐谷君の結婚披露があつて同處へ招かれた。同館は田中智學さんの信徒たちの創建に係るものゝやうに傳聞してをり、又河野君の新婚が同氏の口添に負ふ所のあることも仄聞してゐたが、其他の關係は全く不案内で披露の席へ臨んだ。聞けば、新人君は、やはり日蓮宗の信者で、法縁すなはち良縁といふ次第であつたさうな。一體、私が田中さんと初めて知り合ひになつたのは、もう多分二十四五年の昔でもあるだらう。それは同氏が例の龍の口の法難論で、故重野博士の説を猛烈に駁撃してをられた時分のことと、其頃は折々同氏

に面接した。で、私が初めて讀んだ「高祖遺文録」は、其頃同氏が好意で送つて下さつた其全集であつたのである。

といふ關係から、其日圖らすも同氏及び其門下の諸氏と席を同うし、今昔を又世間を語る間に、求めずして日蓮宗味に親炙するを得たといふのも、全く偶然であるだけに、面白く感じた。

更に考へて見ると、田中氏が、此永年の間、絶えず送つて下さつた「妙宗」だの「國柱新聞」だのが、いつとなく私の心に、或は、自分にはさうと意識してはゐなかつたが、「法難」の醗酵を催しつゝあつたのかも知れない。なせなれば、「國柱新聞」には「日蓮劇」に關する研究といふ長論文も連載されてをり、小松原に關することも時々散見してゐたからである。

が「法難」は全く佛教の門外漢の作である。定めし經文の引抄其他にも何かと間違ひや不妥當な點が多いただらう。だから初めは、公けにする前に、田中さんに多少の質問してそれを正して貰はうと思つてゐたのだが、稽古を始める都合上、私は十二月末になると、もう東京に居ないのだから、大急ぎで印刷に附することにしたので、據らなく書きつばなしである。後に書冊にでもするやうなら、其時は専門家の是正を乞はうと思つてゐる。

上人の言葉だけは、殆ど悉く「遺文録」に據つて書いたといつてよい。勿論、俗に解るやうに、現代語風に和らげてはある。發音も、わざと普通の漢字音にした部分が多い。「法華經」其他の經文とても同様である。事蹟も大抵は記録通りだが、多少の脚色があり、空想があるのはいふまでもない。例へば、

法難の際の只の一従者であつたらしい左藤次を、特に老人として、上人の宗敵東條景信の譜代の僕としたり、其むすめに吃りの少女があつたとしたり、景信の甥に彌八郎といふのを拵へたり、天津の城主工藤吉隆を、事實通り二藤行光の二男とはしない、其女の夫(婿)とした上に、一種の懷疑家であつてさうして重病後だとして、記録には無い二人の念佛僧を黜出したり、蓮華寺で折伏の大法談を上人がした際に東條の黨與が亂暴を働くと脚色したりしたのは、いづれも皆私の作意である。それから吉隆の内室が懐胎臨月であつたのは事實通りだが、彼女が私の作に見えるやうな性行の女であつたかどうかはどの記録にも見えてゐない。小松原法難の場の模様も、事情も、私が舞臺面に寫し出したところは、普通の傳説通りでないことも勿論である。

日蓮に因んだ作は、淨るり(偶人劇)では享保三年の近松門左衛門の作が最も古く、劇では寶曆が最初らしい。歌舞伎脚本通の渥美清太郎君が、特に私の爲に書き出してくられた日蓮劇のビブリオグラフィに聊か書添をして左に掲げる。

「日蓮上人行狀記」(延寶頃)角太夫節。

「日蓮上人法難記」(元祿頃)文彌節。

「日蓮上人記」(享保三年十月竹本座)近松門左衛門作。

「日蓮記兒硯」(寛延二年十月、肥前座)並木宗輔の「日蓮上人記」の改作。

「日蓮上人御法海」(寶曆元年十月、豊竹座)並木鯨兒、並木正三

「日蓮記御法花王」(文化十三年九月、河原崎座)。

右は「御法海」を歌舞伎風に脚色したるもの。

「法懸松成田利劍」(文政六年六月、森田座)。

右は南北の作にて、日蓮上人傳と祐天上人傳とを混合して作れるもの。日蓮記としては、上人の生立、土牢、山伏問答、蒙古賊退治、七面龍女、學林坊、彌三郎一件、鶴飼勘作等あり。山伏肥前坊が後に鶴冠り日親となると言つたやうな趣向なり。脚本傳はれりや否や不明。

「南爾寄來妙法華經」(文政十三年六月、中村座)。

右は勝俊藏の作にて純然たる草双紙張のたはいなき日蓮劇なり。藥王丸の生立、龍の口、鶴飼勘作、七面山、蒙古賊等の筋へ奴道成寺等をさへも綯交ぜたり。八百藏歌六傳九郎等出演。

「一世一代功力妙法宇」(天保九年十一月、中村座)。

右は中村重助の作にて三世尾上菊五郎が隠退披露の書下しなり。但し菊五郎は其後再勤せり。これも、前作同様の甚しい目先本位の臺帳にして無理に藥王丸の生立、勘作、七面龍女、土牢等の筋を取合せたる随分猥雑なる作なり。菊五郎、菊次郎、松助、菊四郎、奥山等出演。

「時南身延御利益」(安政四年八月、森田座)。

三世瀬川如草の作なり。藥王丸の生立、山伏問答、鶴冠り日親、安國論、龍の口法難、鶴飼勘作、七面龍女等の筋を主とせり。

「鶴飼石御法川船」(慶應元年十月、中村座)。

黙阿彌の作にて勘作の件だけを脚色したるもの。芝瓶の勘作と上人、九藏の東條左衛門、八百藏の日期。

「花栴高祖御傳記」(明治二年十月、市村座)。

これも黙阿彌の作にて、龍の口の前夜、彌三郎一件、佐渡塚原等を仕組めるもの。前の諸作に比ぶればやゝ日蓮記らしき筋立なり。権之助の日蓮、家橋の日期、芝瓶の彌三郎、三十郎の彌兵衛。

## 「日蓮大士眞實傳」(明治十四年十月、中村座)

勝蔵の作にて、小川泰堂の「眞實傳」に據りて、俗傳のまゝをほゞ其まゝに誕生より他界までを仕組めるもの。中村福助(の後悔玉)の日蓮

## 「日出國五字旗風」(明治二十四年八月、中村座)

これも勝蔵の作にて、主として蒙古襲來當時の事を仕組みたり。中村福助の日蓮

此以外には、明治二十七年四月歌舞伎座で上演した福地櫻痴の「日蓮記」があり、同じく七年同座で四月に上演した森博士の「日蓮上人辻説法」といふ一幕物がある。尙「國柱新聞」の星野氏が擧げられたものに明治四十二年十一月三崎座上演の「日蓮上人」(三幕五場)がある。これは水谷秀葉作で、辻説法、松葉ヶ谷焼討、龍の口刑場、佐渡三昧堂を見せ場としたものであるさうな

以上のうち、角太夫節のも文彌節のも私は嘗て見たことも聞いたともない。次に近松の原作も果して傳はつてゐるかどうかも知らず、讀んだとは勿論ないが、彼れの晩年の作風から推すると「見硯」とどう異つたものでもなかつたらうと想像される。さうして「見硯」は、あの通りの物である。其次の三種、御法海「も」御法花王「も」成田利劍「も」、私は見たことが無い。「南爾寄來法華經」と「一世一代功力妙法字」と「御法川船」と「高祖御傳記」とは、幸ひに河竹繁俊君から借覽することを得た。いづれも故黙阿彌の所藏である。「身延御利益」は草雙紙仕立の筋書になつてゐるのを渥美君から借りた。「眞實傳」と「五字旗風」は「歌舞伎新報」に筋書が載つてゐる。

ところで、是等の作の内容だが、福地氏のと森博士のとを別問題とすると、今更改めていふまでもなく、其大多數は例の目先本位の草雙紙仕立の散漫な作意で、事件の運びも、各人物の性格も、不合理、不自然勝手次第の夢幻劇なのである。つまり、名を日蓮傳に借りたまでのもので、宗教味はいふと、たかゞ荒唐無稽な靈驗や奇蹟を纒かに平面的に一寸粧點したといふだけのことで、其外には、何もない。その上、日蓮はほんの時たま、ワキ師役となつて顔を出すに過ぎない。中には、ツレの役を勤めてゐるに止まるものもある。要するに、大抵皆「見硯」から流れ出した濃淡さまざまの五色の水たるに外ならない。

或は、勝蔵の如く、やゝ活歴前派式に綴られてあるかと思ふと、それは、日蓮大士眞實傳を只だらしくなく叙事劇式に引直したといふまでのもので、いはゞ、活動寫眞を生で見るとやうな作意である。だから明治十四年頃でさへ、流石に長丁場に過ぎたので、書きは書いたものゝ、出幕にならなかつた部分が多かつた。小松原法難の件も、たしか一幕三場ぐらゐに作られてあつたかと思ふが、一寸出して中止してしまつた筈である。さういふ長い作だから、主人公の上人は、随分たび／＼顔を出してはゐるが、俗に所謂聖者型、高僧型を適用して、いづれかといふと、消極的聖人風に書いてあつて、どこにも其人らしい趣が見えてゐない。「五字旗風」の上人とても似たものである。

さすがに「日蓮記」は、作者の居士が在來の諸作に慚焉を覺えて、俺は英雄僧としての日蓮を描かうと標榜して筆を把つた作だけに、九代目團十郎が喜びさうな大分豪放な日蓮が畫かれてゐる。けれども居士もまた例の一代記風の叙事劇の形式を墨守したため、事件の曲折ばかりが眼目となつて、どういふ心理的興味があるでもなく、人物は勢ひ類型に墮してしまつてゐる。随つて居士が書く他の活歴物と心理的に

も、事件的にも、どこにどう異つた特異點もなく、日蓮を主人公としながら、宗教劇らしい意義や空氣や色彩は存外稀薄なものになつてゐる。作者の言によると、最初は發端として小松原法難をも書いたとか、書く豫定であつたとかだが、興行者側から差止められたと言つて、遺憾がつてゐる。が、これは餘り長過ぎるから止むを得なかつたことであらう。

私は、是等の諸作は多分もう將來の上演には適すまいと思ふ。殊に叙事劇風の長い作は形式が形式だから切縮めるのが困難でもあるし、それに性格劇としての面白味は殆どないし、自然味も眞實味も宗教味も乏しいのだから、今の人の心線に觸れる點が殆どない。一體、龍の口の法難などといふ崇大な場面を——繪か音楽で、半分暗示的に表現すればだが、さうでないといふのは無駄な骨折である。それから俎岩の件なども、むしろめる虞れのある場面を——劇にしようといふのは無駄な骨折である。それから俎岩の件なども、むしろ琵琶歌や叙事詩に適したものはあるまいか？ 佐渡の謫居なども同じくではないかと私は考へる。といふのは、若し日蓮を劇の人物として現さうとするならば、先づ須からく其最も強著に其特殊性格の活現されてある部分に就いて其題材を求むべきであると信するからである。そも——宗教家としての日蓮の特異點は何處にあるのか？ 彼れを傳教や弘法や法然や親鸞や榮西や道元に比較したとする。特に目立つて異ふ點は何であらうか？ 私は彼の人の唱へた宗義其物の事をいふのではない、宗教家としての其對世間的態度に就いていふのである。いふまでもなく、其豫言者の態度、革新家的態度、其破邪顯正的態度の猛烈なのが彼の人の特色である。此點に於ては、我國では、前に其匹儔なく、後にも其比倫がない。世

界の宗教史から言つても、破邪と顯正とを兼ねた豫言者であり、又破壊的であつた上に建設的な宗祖でもあつて屢々必死の迫害にも逢ひ、而も身を幸ひに完うしたといふやうな例は極めて少ないであらう。さうして其めでたし——に終る部分は劇には不向だが、其前半生即ち猛烈な豫言者であり、革新家であつた部分だけは最も劇化の目的に適するのである。凡そ聖者や高僧や賢人は、彼のアリストートルの悲劇論などは度外視するとしても、尙劇の人物としては不向なものである。餘りに聰明圓滿に過ぎて、過失のあらう筈が無いので、比較的少數を除くの外は、大抵事實上、悲劇でない。だから強ひてそれを悲劇風に脚色しようとする、どうしても一種の運命悲劇となりさうな虞れがあるが、主人公が佛教の祖師である場合には、因果應報も餘りに小乗式で甘過ぎようし、西洋風の運命論は尙妙でなからう。かといつて、喜劇式に取扱はれべき題材でもなければ性格でもない。それに、内外ともに、凡そ聖者とか、祖師とかとなると夥しい崇拜者が附隨してゐて、それらの連中が、めい——に其見識に相應した祖師又は聖者の理想的肖像とか性格とかいつたやうなものを、其腦髓中に製作して安置してゐる。随つて、其聖者なり祖師なりが藝術化されようといふ段となると、其人たちの期待や誂へや注文や講釋がおそろしくむづかしい上に、百人百色だといつてよいほどに難多でもある。だから、出來上つたものが、先づは注文の壺にはまりかねる。古來、内外共、繪や彫刻は姑く置くとして、大きな聖者を主人公にして劇を書いて、嚴密な意味で成功したものは殆ど全く無いといつて當然だらう。假に相應に書き得たとしても、そんな圓滿完全な聖者に扮し得て、其人らしく感じさせ得る俳優があらう筈もなく、あつたところで、さういふ芝居は、信者以外が觀ては

餘り面白いものでないに相違ない。

が、野に叫ぶ豫言者型、權勢に反抗する革新者型の聖者には、おのづからにして悲劇的性格が伴つてをり悲劇的運命が附隨してゐる。勇往邁進して、敢て迫害を招致しつゝあるやうな所に、豊かな悲壯劇要素が備はつてゐる。此意味から見ると、日蓮は、若し運命がもう少し苛酷であつたなら、立派に悲壯劇の主人公となつてしまつた人だといへる。人によつては基督に境遇や態度が似てゐるといふが、性格に於て、又其宗義に於て大分に違ふ。ウイクリッフやルーテルにも似た點が無いでもないが、行き方も、性質も迫害の程度も違ふ。若し末路の圓滿なのを日蓮の幸運とすると、其他の點で最もよく似てゐるのはボヘミヤのフスと伊太利のサオナローでもあらうか？ 共に、反抗者であり革新家であり、最も激しい迫害をも受けた。さうして此觀察からいふと、日蓮記中で、最も劇的な部分は辻説法事件の前後で、殊に伊豆流罪赦免以後、房州への歸省、小松原法難といふ邊が、殆どそのまゝに劇になつてゐるといへる。上人自身の信念も、法華經の行者としての信念が、此一難以來更に一層熱烈となつたといふとが顯著な事實であるらしい上に、法弟が一人、檀越が一人此法難に殉じたといふ悲壯な事實までが備はつてゐるので、其事件の劇的色彩はますます濃厚になる。とにかく、暗に信仰の力といつたやうなものを體現して見ようといふことを念頭に持つてゐて、筆を執りかけた私に取つては、此法難前に於けるバーチースの確執の根強さ、次ぎ／＼のシチュエーションの急迫、危殆、緊張、並び起るインシデントの簡明直截なぞといふ諸點が、すべて私の描かうとした主意に便宜を與へるらしく思はれた。又、目下の世間は、デモクラシーや労働問題やス

トライキやサボタージや怪しい爆裂薬事件や毎日のやうな殺人事件やで、随分物騒でもあれば不安でもあるのだが、尙どことなく總てが功利的であり、打算的であり、主我的であるやうに見えて、眞に命がけで仕事をしてゐる者は極少數か、或は殆ど絶無かとも思はれ、私の描かうとしてゐる人物なぞとは、少くとも其、忘我的感激といつたやうな心作用の全く缺けてゐる點に大きな差があるのを頗る意味深く感じた。で殆ど一氣呵成に筆を走らせて見たのであつたが、果して其れが相應に描かれ得たかどうか、自分の作ながら、印刷の初校さへも見ない今は、更に分らない。

作の内容に關しての話は此くらゐにして、どういふわけで、あゝいふ形式を取つたかといふことを話さう。といふのは、形式からいふと、「法難」は在來の舊劇のそれだといつてよい。私は「役の行者」や「義時の最期」は、初めから花道などは使はない積り、又は寧ろ使ふことの出来ないやうに書いておいたのだが。今度の作は、「桐一葉」や「孤城の落月」や「名残の星月夜」などと同じに、花道をも利用する積りで書いておいた。いや、むしろ是非とも使はなげりやならないやうに書いたといつたはうが當然である。これには少々仔細がある。

既に折々いつたことだが、現在の我諸劇場の舞臺及び見物席は——帝劇と有樂座と聚樂館ぐらゐを除くと——悉く舊日本式で出來てゐるので、所謂親炙様式の構造である。即ち舞臺と見物席との間に峻別がない。役者と見物人との間にも峻別はない。親炙しようとするれば、すぐそれが出来る。さうして其媒介物となるものが花道である。見物も幕間にはそこを往來し、役者はもとよりそこを往來する。で、花道



は取りも直さず虚と實との橋渡しをするものであつて、夢と現との限界を暈す作用をする。そこに親炙式劇場の特色がある。随つてそれを利用し得ると得ないと、舊劇の長短得失が消長する。又、新劇として、既に舊式劇場で演ずる以上は、それを利用しないのは、何等かの意味で損失であるといふ結果が生ずる。少くとも舊劇は、此親炙様式と絶縁すると同時に其面白味の幾分を削り去られて、若干の不便を経験するのは事實である。であればこそ初めは泰西様式を其理想として建てられた帝劇すら、舊劇を演ずる必要上、だん／＼頻繁に花道を使ひはじめて、今では合の子の劇場となつてしまつて、つまりどちら附かずの不便を忍ばねばならぬやうになつてゐる。

新劇團は、併し、泰西式の劇場を舞臺として始めたはうがよい。けれども困つたことにはさういふ劇場は、今のところ一つか二つしかない。それも一つは帝劇だから、一興行なつた五日か一週間限りとしても年に何度借り得られるか當にならん。かといつて有樂座ばかり演じ慣れたやうな劇團では、いつまで経つたとして逆も眞剣の大戦争は出来るものでない。陸ではかり戦ひ附けてゐたものは、内海へ乗出したばかりでもまごつくであらうから、到底大洋戦などには堪へられもせねば、てんで軍艦の準備が無いだらう。といふのは、適當な脚本がなからうといふことだ。有樂座は小劇場式の脚本に適した劇場であるだけに、あそこで鍛つた藝はたかゞ帝劇でやり得られるが關の山である。それも興行用としてはどうであらうか？ 私は多年の経験上、此事を最も心配に思つたから、新文藝協會の爲に、先づさしあたり、舊式劇場に適するものをと考へたのであつた。四方密閉式の、靜寂な、泰西式の劇場ではかり演じ馴れてゐた者

が、半戸外式の、明放しの日本式劇場へ急に移住するのは困難だが、舊式劇場で叩き込んでおいて、それから泰西式へ移るのは決して難儀なことではない。只白まはしや科や表情等に不自然や不眞實味を沁み込ませないやうに警戒すればよいのである。

此形式の使用と共に、私は成るべく多く役者連を、筋肉的にも働かすやうに書いておいた。これは在來の興行用脚本の注文通り、成るべく「動き」を多くといふのではない。別の理由がある。私はこれからの新劇團は苟も近い未來に國劇の刷新に資さうといふのなら、もう彼の小劇場主義は棄てなければ駄目だと思ふ。小劇場主義は到底或特殊觀衆のための物でなくてはならぬ。又決して營業となるべき性質のものでない。だから、其方面は、資産家とか、少數の藝術家とか、好事家とかの特別運動に一任しておいて、他の新劇團は、勢ひそれを營業ともせないわけにはいかない以上——先づ其如何にしたら營業としての安定をも得て、其國劇刷新の計畫をも續けて行くことが出来るかを考へて見なければ迂濶千萬な話である。ところで、誰の念頭にも眞先に浮ぶのは、基本資金とか保護者とか常置後援團とかいふことであらうが、私に言はせると、それらは、いざ、一の新割烹店を開業しようとする際の資本主とか主な顧客とかに當るもので、最も根本的必要物ではあるが、それがあつたとて、肝腎の亭主が料理の理想が低く、板前の腕が鈍かつたり、おかみや番頭が氣が利かなかつたり、板前の若い者が田舎仕込に過ぎなかつたり、客を引附けるに足る美しい酌人が常抱へになつてゐなかつたりした時分には、開業後忽ちにして店がさびれてしまふであらう。が、斯ういつたゞけでは、まだ／＼話が實際的でない。それよりも、何よりも大切なものは

材料である。山海の珍味である。魚類である。肉類である。野菜である。酒である。醤油である。いかに庖刀が冴えておようと、材料が場ちがひ旬ちがひであつたら、やがて客足が遠のかすにはおくまい。維新前からの名代の割烹店にも比すべき歌舞伎、帝劇、市村其他の舊劇場すらも、今では近海一圓の大不漁で、魚河岸のからんくで、材料の怖しい缺乏に頭を悩ましてゐる。けれども、假に譬でいふと、彼等は丸本物とか。所作物とか、黙阿彌物とかいふ干魚や乾物や精進料理で、却つて客を喜ばせて、ともかくも千客萬來の策を講じてゐるからよいが、新文藝軒は、一體どんな材料を持つてゐるか？ 在來の小劇場式、試演式の一品料理では、逆も全國の客は呼べまいぞ。反譯劇といふ鑑詰物も、もうよつほど珍らしい味のよい物でなくては贅澤になつて來た舌には合ふまいぞ。よし當分は或材料が續くとしても、同じ材料ばかり食はせたら、客は次第に減つてしまふだらう。金ぶらに鶉椀式は、同じく小會席風であつて、大宴會式でないと思はねば嘘である。新文藝軒は、何を全國民に薦めようとするのか？

私は、比喻を離れて言ふが、これからの新劇團は、寔に骨が折れもしようし、無理な注文でもあるが、是非先づ其藝範圍を大いに擴げて、いはゞ何でもやれるやうにしてかゝらねば、忽ち自滅してしまはざるを得ないと斷言する。又、さうしなければ、さう／＼適當な脚本が有らう筈がない。所謂新派が行詰つたには種々の複雑な事情があらうが、其主な理由の一つは、其脚本の千篇一律、いつも鳥料理といったやうな一律に在つたといへる。舊俳優のやうな七變化をする藝素養のないことが彼等の衰微を早めたといへる。股鑑遠からず、小劇場物や反譯物や現代物ばかりを材料にして、鑑詰専門や絹ごし豆腐ばかりを自慢にして

ゐた時分には、更に一層衰亡の日は早いものと豫期しなければ嘘である。では如何したらよいか？ 有り次第の材料で、見事、客足を引くと用意と腕がなくてはならぬ。

臨機應變の掛引に不斷から馴れてゐねばならぬ。今までのやうな低い調子で、物を言つて、素の通りに樂に動いて、それで自然だと自分も己惚れ、或見物にも買冠られて、いゝ氣になつてゐるやうでは、到底長いこと立つてはいかれぬ。種々の専門料理中に加へられては、嫁御寮の手料理も、これが最も結構だとお世辭で無く褒められることもあらうが、特にそれを賞翫に、改めて自動車を走らす客が、果して何人あるだらうか？

營業として立つ以上、材料はふんだんでなくてはならず、料理法も縦横自在、臨機應變でなくてはならぬ。だから、私はいふ、これからの新劇團は是非とも其藝範圍を擴げてかゝらなければ駄目だと。

では、どんな風にしたらよいか？

絢爛極まつてからの平淡が醇な平淡である如く、極彩色の密畫が畫ける腕で粗畫を畫けばこそ其淡いブラック・アンド・ホワイトにも言はれぬ旨味がある如く、すべて藝は、少くとも一應は、端手な、或はけは／＼しい、或はロマンチックな境界を通過するのが自然であらう。さうしてそれがおのづから臨機應變、融會自在の役にも立つ。端手な、けは／＼しい、激越過ぎるやうな、ロマンチックな、現實離れのした役々をも又時としては、随分無理な不自然な役をも、技工の力で、自然らしく演じ得る經驗をも重ねておいて、其間に人間性の研究をも怠ることなく、いよ／＼其理想の藝風に落着く場合に、自然な平淡な趣味の發揮を力

めてこそ、そこに始めて至醇な藝術味が現れるでもあらう。が、さうでなくて、初手から自分の平生味ばかりを自ら欺いて眞實味である、自然味であると思ひ込んで、小さく、狭く、細く干固まつてしまつた時分には、彼の新派よりも尙融通が利かないから、早老か夭折かに終らざるを得ないだらう。脚本の不足といふことは最もおそるべき新劇團の缺陷であるが、或はそれよりも怖ろしいのは其藝術の狭いといふことであらう。何となれば、其狭い藝術範圍に適する脚本は更に一層乏しい筈だからである。私はそれが心配でならぬので、全くの老婆心切から、新文藝協會員訓練のために、大いに筋肉労働を要する底の脚本を書いて與へたのである。當事者は嘸有難迷惑でもあらう。

といふのは、此形式の脚本も、舊俳優なぞに取つては、何でもないのだが、新劇團の、とかく動くことに不得手な男女優に取つては、大負擔である。だから、或程度まで成功し得るやうなら、それが彼等の後日の爲のよい修養ともなるわけだが、さていよいよとなつて、果してどんな結果になるやら？

白は、殆ど悉く現代語式に書いておいたが、法論だけは、何分にも經典からの引用語の夥しい關係上、處々文章體になるのを避けなかつた。それは吾々がやゝむづかしい哲學的の講話をする時分、もしくは政談者流が演説をする場合などには、つい知らず／＼堅くるしい文章語を用ひたり、漢文讀下し式の語を並べることがあると同じに、却つて自然かと考へたからである。殊に宗教家なぞは、語を莊嚴にするために、原文のまゝを引くのが常である。けれども他の現代語調と不調和にならない程度といふ點に注意はしておいた。就中、日蓮と念佛僧二人との激論の件にそれが多い。

仕出しの村民の言葉なぞは、さしあたり聞嚙りの房州言葉を多少語原へ引戻して、分る程度にして書いておいたが、いづれ作の校正が済み次第に、本月中旬には、小松原の實地檢分に行く積りだから、序に同地の方言を取つて來ようと思つてゐる。小湊までは先年往つたつけが、事故が起つて、電報で呼戻されて、清澄へも登らなかつたから、改めて出掛ける積りである。

私は、東儀君に、少くとも「法難」上演中は、入道して素頭で演じたらよからうと勸めておいた。私も近々法華經の讀誦法を或老師に教へて貰つて、大きに鐵笛上人の檀越ぶりを發揮しようと思つてゐる。

(大正八年十一月 日稿)

○十一月三日都下各地の聯合店議を以て開りて、  
珠本極めを飾るべし但し價の前の店議の如く  
比すん心三倍せし寸珠を以て濁りせんと一七歳  
と不あり、自高しく地つても其の二二三の者を  
購ふべきの場内を以て世價の考へ

一米尾尾花華下語

二冊

合本紙入

上製り七寸尺長し

往年早稲の田考の以るに婚入  
んせしむる下りなれど、價二田記  
まうしら、こんと林田也

一 楯の葉

寶永四年刊

三冊

古今の舟楫の歌集

反祿函

卷首楓園茶屋の回

此の楯の合を以て楯の字と野妹也  
こを千の八ん等因みるこんと婚の  
價十二田と云ふの考くると其の考  
價より、反祿の考と云ふ所の考  
の價あり

外に和政の隸後四冊價八円也

拍價の騰貴(2)者も及ぶ敢て怪しむこと





とも唐書、而して人の心と指を深らざるを以て  
これ亦人の心と指を深らざるを以て、架中侃の揚書、  
堅指、いふに無し、  
てお祝し、  
○

○  
人方董の山、  
時以、  
本と、  
多、

茶綱を、  
十二月九日記

○  
一書、  
是、  
の、  
回、

○  
奉、  
こ、

主として採る。良寛遺墨と云ふ七巻も在るはもの  
南留お志五冊七行を二、此を今と少と今  
まむ義つりさりしか、此七行を二紙珠の白紙を  
を版に刻し、さうして方風紙に似せたり、前  
は、おあうとさうと、遠城也。天保紅紙一冊巻首  
：寺の輪郭の序あり、丈我志園著と云う、何人か  
を詳うとせり、余四十年前、曾て淡島花前の書坊に  
拾得しことあり、其後、懐くて目：觸んたること、  
前：得たるもの、さうして画餅居士著と云うしと記憶す  
去年の以、一後、其と感し、巧ししが、今之んを得て、  
：分るゝの思あり

十二月十日記

○左より取たる、教類の印ハ、まゆ半半の遺墨  
也、徐ニ、三原三歎、完向、古「字」の印ハ、半半の阿  
圓山大匠の遺墨、什ニ属す、さうして、半半の之  
凡と珠を、さうして、珠ニ、あうし、半半、後、後、貴  
ニ、言の付しと、悉く、賣印ヤ、し、未、未、此、此、の、印、を  
特ニ、保、存、し、し、出、さ、り、然、る、未、未、此、此、人、取、す、ま、臨、み  
意、入、く、痛、し、此、印、教、類、を、奉、成、先、生、に、寄、上、し、を  
所、以、以、つ、と、葬、式、の、具、入、と、奉、上、し、し、と、痛、く、さ、う、と、  
半、半、子、さ、う、く、之、ん、と、護、す、る、ま、の、あ、の、さ、う、の、如、き



徐三原刻

石印

田山迂回



同上



同上



古院刻



田山迂回刻

仿陳曼生



石印

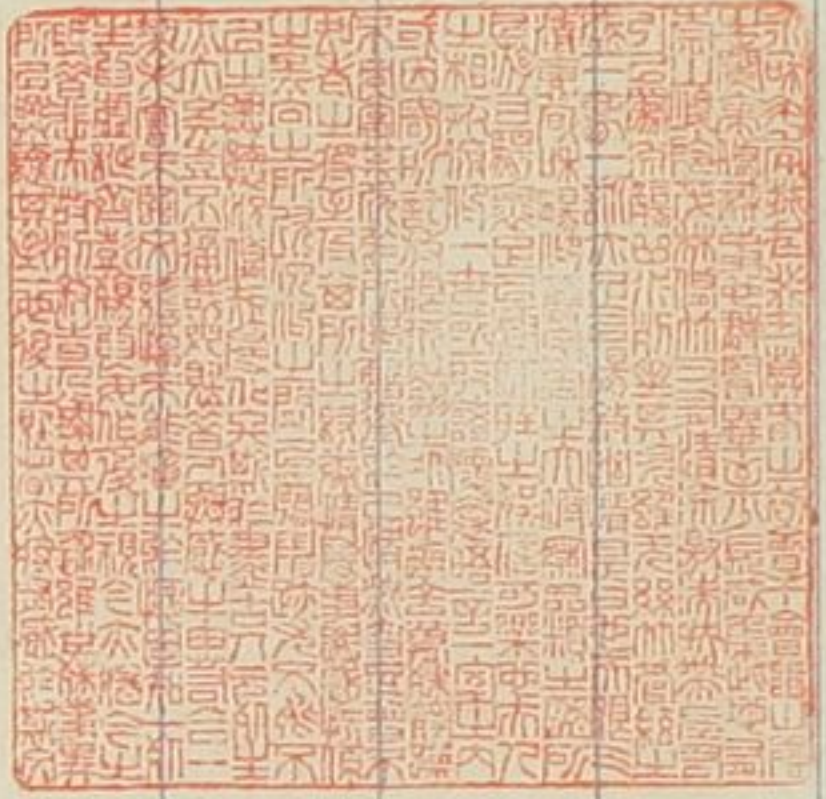


石印 無款

狗鈕

蘭亭序

半通刻



橋鈕 石印

天保九年

半通刻



全購入、小通遠刻二顆と苦心の込、其の  
●涇城に物やんことを夏、以時、まくの金をを  
りし余の染中、うりそ、但し此二顆、おす  
傍ハ、通の巻を、通のみの、の用、使  
べし、他、使用、す、う、る、を、條、件、一、条、十  
小通の心、う、あ、ん、多、斯、き、精、刻、一、七、也  
可

此印、附池、と、山、山、大、通、の、印、譜、四、冊、三、條、相  
公、印、譜、香、雪、池、印、譜、一、冊、あ、り、共、二、冊、入

大正六年十二月十一日記

五印

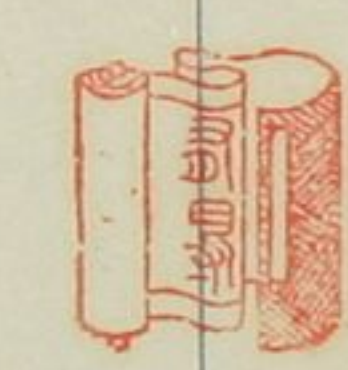


いろは  
牛心

凍石



流水合  
明月前身



大正新印



貴物印

大正新印



牙林

材牙  
支那新書

五十二夜燈

此等の新印皆昔と迥然の故也。筆字も互  
き。此の印譜を心え折の材料とす。と  
人となり

新印中「固真長壽」の牙印一枚ありんば

10 山田印

此の印大正の新印也。未だ大正の由心もやま  
を詳しんば。然るも大正の用印も格を  
又古流刻「真」字の印も偶々其名字を因  
めするを以つて大正當つて自家の印とも用  
せりとす。之れ等二印。余も名家私  
印譜の内：収りて可也  
又云く孔子像の印も在る家に載りたるの圖  
を彷彿し。此の「未」建章も其の類也  
書せしものも記憶も寄るとは正起印を  
作り余も亦余典を感し。懐しと一大名印

此同書同文を刻せしめざるもの今者架中一冊  
あり、高的佛に齋聖書に於て同文とせしむ  
莫と奉行せしことあり、半進の刻印をん  
と、摺刷し、紀念する人等衆に配らる

右等印の外、印譜若干あり、香雪齋印譜二冊  
大正印鏡四冊を扱て架中に置きて、香雪齋印  
譜三條相公の私印系、お跡在印譜に収  
めたるものを扱て、半進相公全副、篆刻を教  
授せし由縁あり、此印譜のあらざるの故也  
但し此印譜、寫本と見らるべきものなり、全が

山田印

架中現に在るもの、異国あり、**大正印**  
鏡三種あり、一帳子の形とあり、長きもの  
半進が師の印鏡と物、帳、焼りてあり、  
ものと覚し、外、大正印鏡と揮心の刻し  
る印鏡、此摺りたる印譜二冊、兼、香雪  
齋印鏡一冊あり、これ既、今より架中にお  
る大正印譜と異国あり、**おん**、之れを家  
蔵とす、**おん**と云ふ、

○筆鏡、**おん**、坊間寺蔵とあり、二三の方を得  
、南無寺蔵、**おん**、一冊

其入江四年、徽宣の法字を以て  
排印せしもの、今このを古稀に

一 仿唐字を説文解字木部篆異

此者六稀である、唐人の篆書

米友仁の篆字あり、同仁二年書

藩の序並に署換あり

版式辨良、卷尾に篆字を換

出す

一 宋末元平、海屋室賦

昔、海屋室賦一帖

卷首に須静米の印あり、卷尾に海  
屋の印あり、内名首尾同し、  
す、卷尾の印後に換く、  
如し、印のあり無に、  
なること、寸粒を容れず、  
中、抄本の臨む一二と、  
其、於也、此、打、  
獲、  
四、  
う、  
る、  
を、  
感、

一 襄陽石經

龍華寺佛像の神境内なる宋四  
法寺の阿彌陀佛碑拓を此也  
余の筆中にて拓するものにして  
るは母架中のもの甚だの劣ん  
り多しを換刻するが如し又  
り得たるもの原碑の拓を略す  
此經河人の書法を今まを以て  
りしが母架末の跋に陳隋陳仁  
積者とあり又「其中二十一字靈

其ま水所為接證人因此知之云々  
とあるを初めし筆名を知るを  
得たり

○此の得たる拓の臨む所を帖とあるは、  
き州に乘りて臨し、筆の一帖と為す、自ら思  
ふに臨むを此類し、形は物に若し、筆は  
心著し、意は終に福し得たるなり、  
○臨し得た  
る者帖に臨み、是れ多法を善者こと久矣、  
然れども、拓の米元、筆を臨すと云ふ、  
母架の  
七六、拓のむをを免る能はざる也、十一月十

九の改

のありき前坊内通と世に其の方回峰を以て  
一と依り終後坊に應じし神事も思教  
象をわす、余も通と居しを思ひ居こ  
ころ日蓮法祖の著あり、日蓮、信の南  
と此の法甚(注)の八字を考する紀念と  
して意味あり、法ふ法ふ之れを傳れと  
世中の難冊を出しし神をもせしむる  
是興に乗しと教象を思ひ、通の改  
歎の筆のまゝのころ、奇怪を極む、余の

お七一ちし、法ふ年月を以て通  
法ふゆきま、乃ち一象を折るを、一  
時の改(興)也

徳島尾曾村の花守馬琴が振を類と装潢  
し、二卷あり、此次大改の某家に受んと  
余の家、持来り、中、一紙日蓮の八字を模  
刺し、紙をあり、真蹟と云ふ、其の代  
弘明の模刺に係り、馬琴の法あり、又並  
山の某家、あるものと云ふも、葉の流、以  
家のものと云ふ、通、日蓮の真蹟







同此の格を此双六を其方のするも骨牌法のあはし  
る義ありてしし此格を扱さざるもと意の  
の災難と謂ふべし  
十二月十日記  
○昨の日は是郎後法に付し格を讀み、中に耳  
新しき一語あり、日蓮宗の格を祖師の格に  
と讀み凡一種の目論法あり、其法は海法凡を  
自境に入りて其節のぬきもぬきと以つて其書を拍  
り出すことくるも、これと日蓮宗の格を繰繰  
と云ふべし

○昨秋早稲のちさりの騒動に、軒轅も友人の早  
速(格五)場田法(五)高田村の四(五)達と  
井ノ下谷伊藤氏に扱ふる所と定むるに、方り  
余首尾に扱ふる、何の所か、余を慰撫  
するに、余の催したる余らんがうと、余の余を  
解し得ず、瑞成の男、格を讀み、初め  
解を得て一笑す、(騒動後余終身格扱ふを解  
す、而して木林村男、格月前段、格催す、定及  
あり、余を後すへくして、格未だ余を  
後し得ず、由地あり、四留、余と氣の毒と思

あそび多き(余歌の如く勤高の身分首座に  
坐すに此物こと、砂海に色を遺れを出しを余  
の押さをも取ら乃ち、引人休郷方を意に疑  
人翻索解醜湯の夜と考しを祈るに  
酒笑海のことと湯き酒製老の如く和らし  
しと興のあそびを印し終る處を階家の  
天楚屋へし物し又飲むこの家ハ不備の  
從暖多きこと天楚屋を以て花ある家也酒  
七亦暖、一回<sup>○</sup>デモリウテツツ<sup>○</sup>氣を<sup>○</sup>大務す  
亦一時の快也

十一月廿二日録

○山梨福川の行者七絶(平切紙本)を讀み  
来り示すものあり終に始むる詩云々

吟歌の風如勝、有改菊表存即其  
枕上常も終宵秋を細音鳴帰残月作松

壽

福川兵士

余福川の幅を獲ること数次而して之を以て  
又数次、今も架あり、二十無し、この幅最  
とあり、又空架を填むに是る十二月  
二十二日記

○境内の道邊に今東儀外郎像を永樂寺に奉祀

ル集りて法難の秋有るに没既す、屋上トタハタの  
寺郷考えけし、傳生印ありるに列り見れば  
道も是大流動を親しし一回：教授し是日を  
兄と一語を嚙しなるとして余もよく、余も道に  
合しと此を云ふ、道道向くまうく口舌を  
教へて指つてハ河ぬるし、遂に助再の教授を  
為すのじあるまゝと一夫す、道道未だ  
らぬ努力也

○道道法難の御在中、法難やけとありて  
の罪と送時抄を引て日蓮の云々を  
リ、道道送時抄のの蓮の著るを  
~~送時抄~~ ~~ありて~~ ~~ありて~~ ~~ありて~~ ~~ありて~~  
之れを引けり、日蓮の著るを引て、自家  
の著者として敵に對するの證據とす、滑  
秋多きこと、道道送時抄の初めを  
行と改む、

○北堂の遺る懐劍の銘を捨てんとして其の  
様子を得すこと、昔の傳に、高橋義亮  
の事、こ思ひつて出し示し且つ銘を捨て  
天文の年、備前長船春光の刻銘

歴代多、高橋の流しと足利代に此種のゆへに  
懐剣ありと云ふ、此の懐剣の由来は光る刀剣の  
既味ありと云ふに世中多く刀剣を購ふは  
其内の一也、北郷生家にして高橋未えは  
あり、其の相高き作あり、海七先名の  
鑑定ありしが所也  
十一月廿三日記

○飯後五斗のゆへに田地詐徳未九徳給  
此賣上代多ありの十餘の流掛あり、此ゆへに  
此農者換に國する荒干の秋の税あり、又未年  
分の税差能人に前後七あり、る四十五日給  
米價未あり、騰貴に此地の收獲をみる米價  
は甚る少十圓也、此の田地は四反、約千二万圓を  
購ひ入らるるものあり、今に三倍の價ありと  
云ふ

○大隈家の家計、月々米田を要する、乃ち十二畝  
田の年収は無んば、今も十年を前由  
大隈族自から流し、此ことを記帳する、其ゆへ  
るも一年五畝田を要すると云ふ、其ゆへに  
額以上、其のゆへに、此の十二畝田  
の収入を利益として出ることと略々あり、是れと云ふ









出—此の端の尻を搦んじ、その尻の毛をわくの部を  
他の種之を扱に於て之を之に似つるその端の尻  
を重くしとす。今此の毛を重くしとす。其の  
先細を以ての毛扱あり。其の毛を以ての毛扱  
教の助教、向後河とす。其の毛を以ての毛扱  
あり。其の職制を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
し其の殿最を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
房中を捨来し、且文書南生徒の勤志の時を  
記す。其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
云々。即ち其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱

何と云ふかある漢字其味の在るに似思ひ付い  
たる流の毛扱あり。其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
謝三十七支ある也(地方の毛扱七十五支)月俸一四二  
十五支とある。地方の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
一特徴あり。又其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
定款月金二十圓とす。其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
の毛扱(岩油等墨紙筆解等)を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
其の毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱を以ての毛扱  
此と見え、昭和の部は、門守、お使、おむらひ

能と揚げんとするものと異種の感うする。前者は  
風紀の源と元とせしむるに、恰も子織居に掛ける  
ポイントメンの如くである。凡んハ大切にしてある。あの  
門前もこの食生の多き徳を勤めしむるに、清徳  
とい無つた。ヤ使と華も食生を利用しむることも  
あつた。ことを記憶する。此の視察の内々、ウ我掲  
示の頃うあつて、その第一校則に入校則うあつた。  
その中一項に、此の管内の同の者うして、及あの  
人氏就き、その所、今之を第一大区として置く。土  
地の使に、後ハ也故、之を所留と成と辨くこと

ある。則ち、おれ、この由りて出来ぬ。其の性格、このこ  
れ、此の、富の行政、これを大に、劇し、此の分  
か、ある、この、某区、の、目、この、又、教、則、う、終  
りの方、に、勸、を、居、る、その、と、建、その、政、令、の  
正、則、は、ある、こと、この、ゆ、に、し、て、ある、係、し、純、粹、に  
正、則、の、や、む、を、或、は、生、徒、勝、え、る、もの、あ、ん、と  
要、う、要、別、を、あ、つ、け、し、けん、も、係、立、む、無、い、と  
断、り、つ、て、建、その、本、方、に、この、ま、も、正、則、む、ある、こと  
を、その、を、居、る、遊、動、知、る、革、新、の、氣、分、の、漲、つ  
て、居、る、こと、の、あ、る、め、え、と、ある、この、深、い、三、年、の、分



函を購ふ箱に完結其年鴻寶高印行とあり石印本と  
しと群のりる在木也。余、架中倭版薄葉本を是す  
と云ふ此中粗本古香南本と略し形を同し架中  
に在する古香南を淵鑑類函と共に置かんことを欲  
しつら所と重複を承りす癖ひ入る亦是寸珍文  
良庫恰南の考し價六十圓也 大晦日記  
本年圖書を購ふ為める支出の金額三千圓に垂  
んとし二千五百種を得而して是れ其殿也

大正九年一月以降

○前々大島を録しつる所を授け代稿友一又の  
今のこと北地抄り得記ある上京を撰し漢文  
訳しつもの本年初刊に載せしむる別ち左に収  
ふ

○新書二冊と名御に因し女國府津の山表に在  
る高向を依りて閑法一冊と名しつる初書也  
高向抄いひて余が、日付の女史光の記ある高  
を借り、余が、高向の二冊を依りて二冊と名  
又四書正字に家法一同名し、故経難読す  
峰酒次今より題する木末此の杯難読也













余由つてこの帳と自得  
 帳と見つて帳中の畫の筆  
 者知らざるもの多し然  
 と名暗能畫(一)岸田吟  
 考の蕭薇の画紙舟  
 の福體おもしろし  
 新字の撰表の者任阿  
 津田仙の考七亦珠余  
 前日寸珍方画帳と得  
 十一春所成高湖山柳

大の十を志山 新字の撰表  
 生お嘉祥 新嘉祥  
 皆云  
 香雨 名音派一号柳塔  
 西洞 名音派一号柳塔  
 山雲 法舟 名音派一号柳塔  
 新地 柳庵 新地一印  
 中村 新字 新地一印  
 大内 古志 二号露堂  
 探堂  
 定邦

桐長  
 岸田吟 名音派一号柳塔  
 小柴 新海  
 津田 仙  
 香雨  
 柳庵  
 桃后  
 香雨 名音派一号柳塔  
 松雨  
 祝斎

津田 探堂  
 小柴 柳湖 名音派一号柳塔  
 津田 改字 名音派一号柳塔  
 新地 柳庵 名音派一号柳塔  
 物音 新字 名音派一号柳塔  
 以上二十六年迄

北前舟の帆ニ出陣後、梨子等の舟に法家の筆跡ありと  
収む。北帆に収むるもの一石ありと、市後するものありき。  
かく、船の廻り、姉妹帖とあり、似て懐かしく、大き  
く、前購のものに比すれば倍し、寸餘と呼ぶ。  
清々しきことを、唯の寸餘、書き、聊、大方の  
く、然るも寸餘、書き、之れを、容るるの、人、あるを、以て、之れ  
を、寸餘、文庫中のものとして、為す、二、坊、け、無き、もの、也。

○複製者の竹田自筆 影写 添えん方の家持の竹田  
つ初りも古紙に紙の跡ありき（と云う）  
●紙のよさを、鼠はかきあつた、野のひあふ  
何う故果のよさのぬ、こゝも載せしむるを又  
の半はんこきぬ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、







白紙のりあはるゝ又是千の本あるも  
此書ありし年トントるものもさう  
リ入内古本の跡心又さ。香丸の麻呂  
氏に持をるゝ振山文庫の御書

劉石洲抄講 四

可らうの改り

別編録 二十冊

秋田改りし重改りをもも修補をこ  
ころも少く甚難

○左に改りし数書は明治三十四年重島勇と在り校  
用心改修し流布中一或は流布せし男の  
語らん比ことを其折に考き改りし比中のみある  
此改りの多しと知るも方り持さうし  
乙切り故りはんが。舞あはるも及六四こと見  
ハヒ、こゝゝぬめあはるゝこととこしに、















所へ開つてちのけぬすべしとの流備神由  
有ま津田仙か持たぬまのころま 起る余  
もあゆを交け比余まこらふ不田まをひあ  
つたの、此まを擧げま先くまし 開るま保  
たの表まをま強く自あまき 海辺の杖身  
入るまをま生るまし廿ままのま  
ひあつたのが、之れをまくまそれま一大ま  
直るま味まをぬたき月代ままを沐浴ま  
頭髪まをま香まを蒸し花のぬまの用成  
所へゆうけた、まま蒸し集ぬ茶炊ま  
又する況ま決まてもまは自ま表前まその

不可も時々一切服の覚悟をまこたぬ子  
決ましころま

関を毛隠ふ並を寝るま田あむ波ぬらう扱させ  
もまらうま決ましころまの、保し自まの  
まなまころまころまま流ままのまあつたまま  
物まのりま交つてまのままままを死まを機  
ひえんま敵まをまめまの、まこま余まを  
剣の術ま拙まのまもま人と特角ま戦  
あまこまが出来まのま、イヤまをまつて  
まのまをまのまをまのま波ままの心つた  
おんのまのまをまのまをまのまぬまをま















と云ふ言ふは、  
こども無いと云ふ人の去りし十人の自命の捨てたの  
けりやあなをともふに、  
其の味つせぬのよめ、  
まゝに施したる教のあつたと思ふに、  
あつたに、  
くまのてぬおこふを、  
ハ北に海りの労働者と、  
ういん、  
病と云ふは、

業と云ふは、  
の利害をもとらうと、  
と云ふは、  
此のを、  
又、  
こゝろ、  
の牛、  
まゝ、  
の、



石雲山房鐵筆潤例

石、木、竹、印 一字二圓

瓷、琺瑯、印 一字八圓

牙、角、銅、印 一字四圓

水晶、珊瑚、印 一字六圓

黃金、白金、瑪瑙、印 一字十圓

銀、琥珀、印 一字五圓

玉、寶石、印 一字二十圓

右印方五分爲限。大

者准增額。貴重印材。及異形變體雙龍四神之類。別議。

印章鑑定 每件 五圓以上

篆刻評正 每件 壹圓以上

篆籀揮毫及筆管。硯蓋。香筒。匳。匣。題籤。齋堂扁額。楹聯之雕鐫。須面罄

家住東京麴町區隼街五

電話番町一千六百番

電話大段百四番



也此の旨も七言一しと云ふこゝも七言の  
科改筆字の法もさうあつて相違  
やと家宅籍入し節貴家の中  
跡し、名家考簡、此方改めし全  
部考家の中徳し、本考簡、別冊  
目録し、二六六の節ありし雜  
考ありしもの九言とありし心  
も、考集ありしもの中しと得易  
さるもの七言、是れ散佚と、  
跡考記ありしもの方考家の  
注釈あり

ニ移し、其の減りも、  
か生の言も本考とし、  
後考家も、  
意の論、  
考集永く、  
本考簡考、  
らも、  
ハ考、  
考の、  
を、

又此北書之汚書簡に附屬するもの  
は此の海をるる上じの標的として大  
子らありあまた方簡紙の由多の者  
流を要するもの或は待ておこつとき  
ありに者簡紙と題し随時考きあ  
め、雜乘ありし之れを今冬ももて  
お成りてし其の簡紙を得て海を  
上りてとせししと関著に後  
十年苦心の物語主帯位の郵書に代  
はり、お成りてし其の簡紙を得て海を  
上りてとせししと関著に後

大正九年一月廿二日

大正六年現在の家をあたりに移りて  
互におおきき意の好意を出てり  
まを要するもの或は待ておこつとき  
ありに者簡紙と題し随時考きあ  
め、雜乘ありし之れを今冬ももて  
お成りてし其の簡紙を得て海を  
上りてとせししと関著に後

















興味ある山ありと云ふを得べし(二月五日初友)

○此類の今に云ふてん有餘の興味ある佛に

隸字

休抱五山状

鼎有刀

古文

款

行古

如徽石屋石  
山園一居天

林有



志縁  
仿古



刻文 緑雲刀

山有但生古  
鼎有刀と竟

京邦互入と云表狭えいを野と云えん

と云ふ一と云と一の中一後四六以の道中  
二顆と云ふしし事り買つて取つと云ふ古の事  
といふもふりたりと云ふ、是も酒の打手  
其江流ひ事りたりと云ふ、其：誰か  
九、此後一門を執し、其の此柱を、中  
を云ふ

二月五日

此の跡後、雨を留し、平山を、と云ふは、  
をらる、前田物主、院を、山に、長待物、  
今も、乃、嫌、り、と、云、ふ

○今、教果中、成、果、堂、(徳、南、精、寺)の、一、年

上梓しき大梅夜話を贈ひゆり讀こす。大梅と  
文守四の一紙和あるなり。淳庵の一人なり。余往  
年北人の書簡一巻を得て珍物多し今その内紙  
一物あり一紙を勤王傳として名に。北の物語を  
後小尾希に配しきものなり。自ら書きたる模版  
二。蘇峯の解説一巻と附あり。一讀物の  
興と免ふ。書上し蘇峯七余と同しく此巻に  
同物あるなり也

(二月六日款)





塗金古銅印 文云菩提

以上二枚 高橋蒲尾拾花  
二月七日印覽列本



○此瓜の爲り後中を採りてあるはありありの女を  
とる狂歌俳句の類と此年未合年二二のせう  
亦捨せしりしん草中をかくる也助ふるべきに  
ありしとて五十首の句を選ひて序紙し  
たり。此次のあるは四十年の流りのお  
流まんたる狂歌俳句の類と是る名し、并  
ひ今中二序中を採りて此方の分を史の  
感慨の句を採りて人をかきし得るある  
んばうつくしにありていへばいへばと  
之を借して其の句を採りて下りていへば  
池

ハ皆を削りて序紙一たり。三浦は此徳古  
の狂歌も其一部なるを採りて其鑑のこととく  
せり。この心後文にぬるあり。あるはありの  
ある所、その世を採りて無きものごとく採り  
て名のとるは其年人の心なきあるをいへばぬる  
ありとていへば

(三月廿七日)

お州三浦半島周遊懐古

明治甲午年一月下浣

横須賀

和蘭國王より幕府に送るも

たり日本幕府の軍艦觀光丸が石湾  
興航の後初度より試運物に秋も生徒  
がしき若徒が常途同艦を横須賀に  
夜泊せしは日雪なりしに夜半に天晴れ  
月光晝なり明なり磯邊に泊りて荒涼  
たる一漁村あり二三の船燈の滅し無  
情の里夜聲は波を添えて凄しかりし

鯨

鯨魚を紐糸し碎り横須賀

今長糸と吾を造解北都市

子ぬを

浦賀

あけの日の大ま鼓、陸橋より福を

つあひべり  
磯の  
小村も

浦賀に遠く遠く固めらるるを慨然と  
子問てす考極全権々下僚の言を言て一我か  
出宗教せし岩隈氏素し力ありし開玉策と評  
行せしち文昭具子をもとの亦一寺の帯を  
の福祉不初り大礎なるを

浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門

浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門

城の島  
徳川幕府の城が島に海松を  
築き之を林として航海者の便に供せし  
（日本唯一の海松の島）さしして火  
勢微弱光力僅照すといふ遠く海を  
望みしは徳川幕府の城なりし今も完全なる  
燈台となりて効力ありしなり

九里濱  
九里濱の東に津波の跡ありて  
今も接岸の跡ありて接岸地なりしを  
右圖と稱し親交今も此津波の跡を  
世に傳へて地なりしは

九里濱  
九里濱の東に津波の跡ありて  
今も接岸の跡ありて接岸地なりしを  
右圖と稱し親交今も此津波の跡を  
世に傳へて地なりしは

九里濱  
九里濱の東に津波の跡ありて  
今も接岸の跡ありて接岸地なりしを  
右圖と稱し親交今も此津波の跡を  
世に傳へて地なりしは

九里濱  
九里濱の東に津波の跡ありて  
今も接岸の跡ありて接岸地なりしを  
右圖と稱し親交今も此津波の跡を  
世に傳へて地なりしは

浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門

浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門  
浦の門





(二月十日記)

○二月十日紀元節五峯後  
表賀別川之賴中  
人畫之題  
乃左之稱  
事

大歌遊筋⑤

積怒不知緣底用  
時宜忽起一雷  
健兜手裏彈丸子  
爆破出天地

平和克復回

老婦老夫扶藜  
息兵常呼載道  
湧歎  
何來一雨銷兵氣  
五歲初曉日月

大歌遊筋⑥

糜奴中傷  
能莫量殺人何異  
屠牛  
羊血河骨  
山色豔淡有  
父以耳無此  
慘  
穆然一曲  
如法河無  
禍五  
云糜  
公一撮  
土嗚呼  
左西  
他心  
道  
何

平和克復回

挽耳下河洗甲兵  
若木飲朝  
朝

宜飛鶴鎖戰氣崇呼載道清秋  
 志夫志物伴志友故友義前不  
 邪元常生好人人心好子吉和平  
 ○是主晴打二院一印二顆成



壽山



壽山

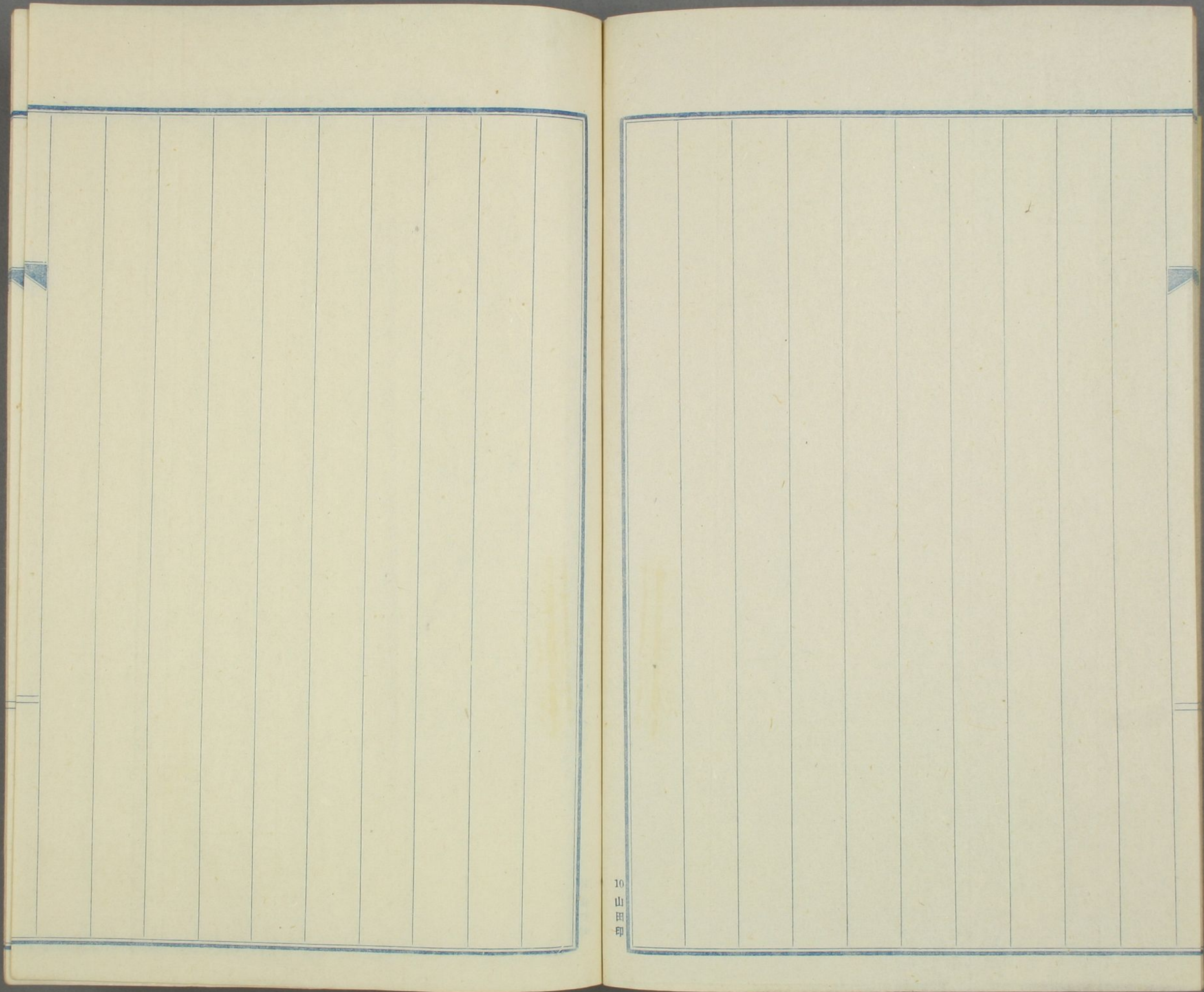
春成二子... 新物出来... 日未

家法水纹飛龍鈕

二月十二日記



款曰  
 偏見非尋常鈕鑿  
 暑仿于古  
 亦中三古法三  
 晴邨居士



以下全て  
白紙

